

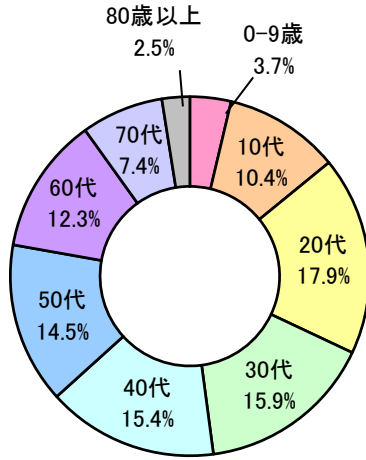
特別展「顔真卿 王羲之を超えた名筆」

アンケート集計結果

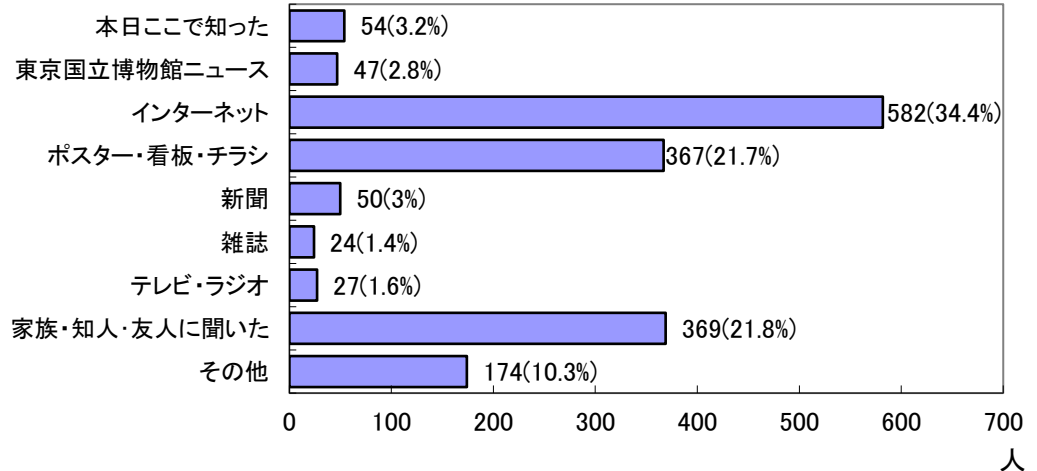
開催期間：平成31年1月16日（火）～平成31年2月24日（日）（35日間）

回答者数：1,223人（総入館者数：198,920人 アンケート回収率：0.61%）

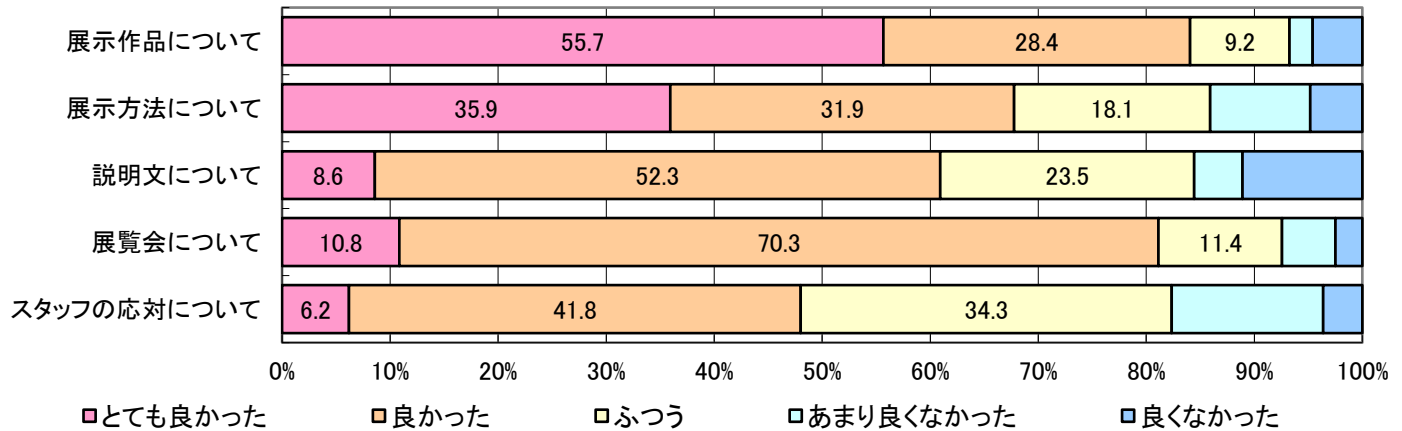
①アンケート回答年齢層



②認知経路（複数回答）



③展示に関する満足度



④主な意見・感想

- ・書の歴史を感じられ大変感動した。
- ・顔真卿の作品が一堂に会する機会に出会えてよかった。
- ・作品の貸与を通じた文化交流を目にして嬉しかった。
- ・祭姪文稿が見られた反面、混雑で充分に見られなかった。
- ・中国からの来館者が多い割に中国語のアナウンスが少ない。

注：上記数字は以下の通り

	あまり良くなかった	良くなかった
展示作品	2.1	4.6
展示方法	9.3	4.8
説明文	4.5	11.1
展覧会	5.0	2.5
スタッフの対応	14.0	3.6

(%)

中国の歴史上、東晋時代(317-420)と唐時代(618-907)は書法が最高潮に到達しました。書聖・王羲之(おうぎし、303-361)が活躍した東晋時代に続いて、唐時代には虞世南、欧陽詢、褚遂良(ぐせいなん、おうようじゅん、ちよすいりょう)ら初唐の三大家が楷書の典型を完成させました。そして顔真卿(がんしんけい、709-785)は三大家の伝統を継承しながら、顔法と称される特異な筆法を創出します。

書の普遍的な美しさを法則化した唐時代に焦点をあて、顔真卿の人物や書の本質に迫るとともに、後世や日本に与えた影響にも目を向け、唐時代の書の果たした役割を検証本展には19万人を超える方々にご覧いただきました。

アンケートの結果、展覧会に対して81%の方々から「とても良かった」「良かった」との好意的な意見をいただきました。その一方で「会場内のスタッフの声掛けが不快」、「作品の前でゆっくり観賞することができなかった」、「休憩用できるスペースが少ない」等のご意見も寄せられました。

今後来館者の皆様よりお寄せいただきましたご意見・ご感想を参考に、観覧環境のより一層の充実に努めて参ります。